様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００２０２

研究課題名（和文）日本古代磨崖仏の現況と保存に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on the current status and preservation of ancient Japanese rock-carved Buddhas

研究代表者
神田　雅章（kanda, masaaki）

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：８０２４１５０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：全国の古代の磨崖仏の現況について実態調査を行い、22カ所で３Ｄ撮影を行った。保存の取り組みについて、地域差が生じていることや、保存整備が進んでいく一方で、風化や剥離も着実に進行していることが改めて確認された。また、尊名や制作年代について再検討し、古代摩崖仏のリストを作成した。各時代の特色と移り変わりを明らかにし、古代の磨崖仏の史的展開を概観した。磨崖仏の所在場所が時代と共に山中から山麓に移ることに着目し、私的な行場から公的な仏事を行う場としての機能を備える場へと変化した可能性について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代の磨崖仏の多くは軟質の凝灰岩に彫られているため経年劣化を抑制することは難しい。22か所で行った３Ｄ撮影による形状の記録保存は、将来の保存修復に備える意味でも重要である。ほとんどの磨崖仏が銘文や史料を欠くため、現在でも評価が定まっていないのが現状であり、本研究では美術史学の立場から改めて古代磨崖仏をリスト化し、尊名や制作年代について再検討し、あわせて古代磨崖仏の史的展開を考察した。磨崖仏の調査研究を進展させ、学術的に評価していくことにより、文化財としての磨崖仏の重要性を顕彰し、保存整備へとつなげていくことが可能になると考える。

研究成果の概要（英文）：We conducted a fact-finding survey on the current state of ancient carved Buddha statues nationwide, and took 3D filming at 22 locations. Regarding preservation efforts, it was confirmed once again that there are regional differences and that while preservation and maintenance are progressing, weathering and peeling are also progressing steadily. In addition, we reexamined the honorary names and production dates, and created a list of ancient Buddhas carved on cliffs. We clarified the characteristics and transitions of each era, and surveyed the historical development of ancient Magaibutsu. Focusing on the fact that the location of Magaibutsu has moved from the mountains to the foot of the mountain over time, I considered the possibility that it has changed from a private place to a place equipped with functions as a place for public Buddhist ceremonies.

研究分野：美術史

キーワード：磨崖仏　山林仏教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の石仏研究は、美術史学や考古学、仏教民俗学などの諸分野の狭間にあるといえる。美術史学においては、大分県の臼杵磨崖仏など国宝・重要文化財に指定されるような造形的に優れた作例以外は研究の対象とはなりにくく、石仏の中でもとりわけ磨崖仏については、不動産という性格上、主に史跡として考古学の分野を中心に調査研究が進められてきた。古代の磨崖仏は、山林仏教と密接に関わり、立地や規模、機能の点からも、中世以降のいわゆる路傍の石仏の類とは本来一線を画すものであるはずだが、その特性が明らかにされないまま、単に古代に遡る石仏の古例として、他の石造物一般と同列に扱われてきた感がある。古代の磨崖仏の多くは、銘記や関連史料を欠くため、尊名や制作年代について諸説あり、未だ評価が定まらないままとなっている。同じ石造物でも中世の五輪塔や宝篋印塔、板碑等の研究が全国的な規模で大きく進展していることと対照的といえるであろう。そしてそのような調査研究の停滞は、保存対策の遅れをまねくひとつの要因ともなっている。古代の磨崖仏の多くは軟質の凝灰岩に彫られているため、脆弱である。いうまでもなく自然と一体化した摩崖仏は、一般の美術工芸品のように良好な環境下に移すことで劣化を抑制することはできない。学術的に確かな評価を与え、記録保存や環境整備を積極的に進めていく必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的のひとつは、文化財保護の観点から、古代磨崖仏の現況を把握することである。磨崖仏の史跡整備事業は各地で着実に進められているが、全国的な視点で捉えた時にどうなのか、その実態を確認する。磨崖仏本体の保存状態はもちろん、覆屋といった保存施設の有無や、モニタリングの実施状況を把握することで、現状と課題を明確にしていく。また、自然と一体化した磨崖仏は常に劣化や損傷の危険にさらされており、自然環境の変化で、突然、岩盤から崩落することもあり得ないことではない。可能なものについては３Ｄで記録保存していくことも本研究のねらいである。

もうひとつの目的は、美術史学の立場から、未だ評価が定まっていない古代の磨崖仏について、尊名や制作年代､歴史的背景などについて再検討をするため､基礎的な資料を整えることである。評価が定まっていなければ、文化財として顕彰し保存措置を講じていくことは難しい。古代の磨崖仏の全容を把握し、概観することで、各時代の特色や変遷を捉え、個別作品研究の集積のような現在の状況から脱却し、古代磨崖仏の史的展開の中に個々の作例を位置づけていく必要がある。その過程で、わが国の磨崖仏の起源や、中国大陸や朝鮮半島からの影響の有無、山林仏教からみた宗教的機能、さらには我が国古来の自然崇拝との関係といった諸問題についても、何らかの成果が得られることが期待される。

３．研究の方法

古代の造顕とされる磨崖仏については、今回、可能なものはすべて現地確認を行ったが、重要文化財の指定を受けている磨崖仏はすでに美術史上の評価がなされ、多くは何らかの保存対策がとられているので、それら以外のものを主に調査の対象とした。当初は温湿度や照度などの計測を行うことも計画したが、限られた時間と機器で断片的なデータを得るよりは、３Ｄデータによる記録保存の方がより意義があると考え、可能なものについては３Ｄ計測を行うこととした。また、山林仏教との関連から、従来あまり意識されてこなかった所在地の標高や地形、特に前庭部の状況についても確認することとした。加えて発掘調査の実施の有無と、実施している場合、遺物や覆屋等の遺構の有無等についても調査報告書でチェックした。

上記の作業とともに、磨崖仏の現状と課題を明確にするために、保存上の観点と、美術史学上の観点、そして造像背景の観点から、それぞれ問題点を整理した。また、古代磨崖仏の一覧表を作成して全体像を把握し､時代ごとの特徴を抽出するとともに､変化の様相を捉えて考察を加えた。

４．研究成果

（１）現地調査と 3Ｄ撮影

現地調査を実施し、現況を確認するとともに、22 箇所（一部中世の磨崖仏を含む）については３Ｄによる記録保存を行った。オルソ画像を作成することで、いくつかの知見を得ることができた。一つ目は、彩色で覆われて形態把握が困難であった彫刻面が、オルソ画像によって見やすくなり、風化した彫刻面の上から彩色が施されている（彩色が後補である）状況が明瞭に確認できたことである。二つ目は、通常ならば足場を設営しない限り観察が困難な大型磨崖仏を、ドロー

ン等を用いて3Dで記録保存することで、高所の損傷状況の把握ができたことである。三つ目は、薬師堂磨崖仏（福島県）において、別保存されている菩薩頭部を計測し、その本体とされる菩薩像の体部に画面上で合成したところ、形状が適合し、頭部の原位置が確かめられたことである。以上のように、3Dオルソ画像化は、形状の記録保存にとどまらず、保存状態の確認においても様々に活用できる可能性があることが分かった。

（２）現状と課題

現地調査の知見を踏まえて、磨崖仏の現状と課題についてまとめた。まず保存上の観点からは、文化財指定において史跡部門が戦前に大方の指定を済ませているのに対し、美術工芸部門はすべて戦後になってから史跡を後追いしたいわゆる二重指定になり、指定件数も史跡部門に及ばないことから、両者の評価の基準の違いが改めて確認された。また磨崖仏の修理は多くは史跡整備事業の一環として行われるため、表面の材質強化にとどまるが、美術工芸の場合は、仏像修理の専門技術者が、脱落片の復位や欠失箇所の補填など、造形にまで踏み込んだ修復を行うケースもあることが認められた。保存対策の現状をみると、数多くの磨崖仏を有する大分県が最も進んだ先進地域であり、一方で７、８世紀の古作が集中する奈良を中心とした近畿圏においては、未だ保存整備の報告書が刊行された例がないため実態が把握できず、計測機器を設置して継続的に環境調査を行っている事例も今回の調査では確認できなかった。その遅れは明らかであり、地域差が浮き彫りとなったといえる。文化財の集中地域ゆえの事情もあろうが、これまでに劣化や崩落により文化財の指定が解除された磨崖仏は２例あり、不動産である磨崖仏は環境を改善することが容易でないため、早急な対策が望まれることを指摘した。

美術史上の観点からは、戦前に川勝政太郎氏により提唱され、以降、広く定着した「石造美術」というカテゴリーが、古代磨崖仏の研究においては必ずしも有効ではないことを指摘した。川勝氏は石仏も石塔も石燈籠も、みな同じ石工が作ったのだから、いずれかだけを研究するのは片手落ちとするが、それは石仏が庶民により造像、信仰されるようになる中世以降のことであり、古代の石仏においては、一般的な木彫像などと共通の図像、様式を示すことからも、仏師が関わっていることが考えられる。特に平安後期になると僧綱仏師による造像が定着することからも、俗人の工人が単独で造仏を行ったとは考えにくい。木仏師に石仏の制作が可能であったのは、当時は主に柔らかい石質の凝灰岩が用いられていたからである。中世になると硬い花崗岩などを、矢を用いて切り出す技法が広まり、石造物の材質は軟質なものから硬質のものへと代わっていく。仏師は硬質の石は手に負えず石仏造像に関与することがなくなっていったとみられる。したがって古代磨崖仏については木造などの他の材質の仏像一般と比較し論じることが可能であり、本研究の意義もその点にあることを明確にした。この点から同時代の仏像と積極的に比較してみると、従来、古代の造顕とされてきた磨崖仏のうち、鹿谷寺跡磨崖仏など数件の磨崖仏については中世以降に下る可能性があることを考察した。また、磨崖仏は、技法上は浮彫りと線彫りに大別され、本来前者は彫刻、後者は絵画の研究領域に属すべきものであるが、両方の表現が混在している作例もあり、この領域の曖昧さが研究対象としての扱いにくさにつながっている可能性も指摘した。

造像背景については、磨崖仏の成立、山林仏教との関係、磨崖仏と寺院、以上の三つの観点から考察した。わが国における磨崖仏の成立については、『常陸国風土記』にみえる「仏の浜」の観音像が文献上最古であることや、現存作例では最初期の飯降薬師磨崖仏や滝寺磨崖仏が、いずれも複数の塼仏、押出仏を組み込んだような複雑な構成になることを確認した。飯降薬師磨崖仏や滝寺磨崖仏については、当時流布していた塼仏、押出仏と共通の表現を見せながらも、写し崩れや形式化が認められた。このことから、山林修行者が塼仏、押出仏を携帯して山中に入り、即席の行場としていたのが、やがて塼仏、押出仏が常設化、大型化し、さらには磨崖に直接刻まれるようになった可能性を考えた。

次に山林仏教の観点からは、まず、磨崖仏が刻まれる場が、山中の比較的高所の斜面などから、時代と共に山麓や丘陵地、河岸などに降りてくることを大きな傾向として指摘した。これは、山林仏教の発達と修験道の成立という大きな歴史の流れに照らした時、一見矛盾するようだが、磨崖仏が大型化し、ある程度の広さを持った平坦な前庭部を有するようになることと合わせ考えると、そこで本格的な仏事が営まれるようになったことを示唆するものと考えた。特に大谷磨崖仏（栃木県）は、図像から護国経典である仁王経との関係が指摘されており、公的な法要が行われた可能性が考えられる。一方でこの傾向は、山林修行の場の条件といえる「浄処」の性格の希薄化ともみなせ、磨崖仏が磨崖仏であることの意味が改めて問われることになると考えた。また、一般にいわれる日本古来の山の信仰、巨石に対する信仰についても考察した。その結果、少なくとも古代においては、仏像と石の関係は、長谷寺の十一面観音像にみるように、あくまで場所や座としての石であり、儀軌のうえからも仏像の材質そのものには結びつかないこと、また石に対する信仰も古くは依り代としての石であり、仮にご神体の石であったとしても、そこに直接仏像を刻むというような行為が、神仏習合以前の段階であり得たか疑問であること、そして最初期の飯降薬師磨崖仏や滝寺磨崖仏が、岩から化現したというより塼仏や押出仏を埋め込んだような表現をとることなどから、石に対する信仰を磨崖仏造顕の直接の動機とみなすのは難しいことを指摘した。

磨崖仏と寺院との観点からは、磨崖仏自体を山寺と同様に捉える見方がしばしばなされることから、それを検証するために、まず覆屋の存在に着目した。造像当初から覆屋（仏堂）としての建造物が備わっていたことが発掘調査によって確認できるのは臼杵の古園石仏（12 世紀後半）

が最も古く、一方で最初期の飯降薬師磨崖仏や滝寺磨崖仏、そして 10 世紀頃と推定される観音堂石仏では、発掘調査を実施した結果、造像当初に遡る遺構は見つからなかったことを確認した。この結果と合わせ、わが国の仏堂建築の歴史と照らした時、古くは、人は仏堂の前庭部で礼拝し、やがて礼拝のための礼堂が前方にとりつくようになり、ついには人が仏堂内に入ることを前提とした中世仏堂が誕生するのだから、磨崖仏の覆屋（仏堂）のみが早い時期から中に行者が籠り修行したような状況は想定しにくいことを指摘した。また古い磨崖仏は崖面の比較的高い位置に彫られ、中には滝寺磨崖仏のように仏龕に扉を備えたものもあり、それらが結界の役目を果たしている可能性があると考えた。少なくとも平安時代後期まで、磨崖仏は行場にはなりえても、寺院の形態までにはなっていなかったとみるのが現段階では穏当であろう。磨崖仏が寺院の境内にあったのか、寺院の付属の施設だったのか、単独で存在していたのか、そして行者はそこに滞在したのか、通ったのか、これらの問題についても考えていく必要がある。

（３）今後の展望（古代から中世へ）

今回、古代摩崖を一覧表にまとめて整理したが、最も目を引くのは、大分県の数の多さである。総数が 30 件にも満たない古代摩崖仏の現存作例のうち、実に約半数が大分県に集中していることが、改めて確認された。この背景のひとつとして、経塚と共通する信仰が指摘されている。臼杵の摩崖仏の中には台座の基部に孔をうがった例があり、これらは経典を納めるためのものである可能性が考えられている。すなわち弥勒仏出現の時まで伝存するように恒久性が期待され、堅牢な石が仏像の素材として選ばれたということである。この説は 12 世紀に全国的に弥勒石仏が増えることの説明としては説得力があるが、大分県については、弥勒仏自体の造像は決して多いとは言えず、また多いのは磨崖仏だけで、一石の石仏はほとんど伝わらないことから、別の理由が求められるべきである。そこで本研究では「岩屋」の存在に注目した。岩屋は当地域に数多くみられる行場または寺院であり、岩場に仏像をまつることを特徴とする。必ずしも摩崖仏とは限らず、窟の内部に木彫像をまつる例もみられ、覆屋施設を備え寺院となっているところも少なくないが、基本的に修験の行場的な機能を持った場所と考えられる。当地における修験の普及の契機として、永久元年（1113）、六郷山が、千日回峰行の祖とされる相応が開いた比叡山無動寺の末寺となり、保安元年（1120）に比叡山に寄進されることが指摘されている。大分県の摩崖仏がいずれも 12 世紀以降の作と考えられることや、比叡山に起源をもつ不動明王と毘沙門天を脇侍のようにまつる尊像構成が多くみられることはこのことを裏付けている。軟質の凝灰岩が豊富な当地に天台修験が流入することにより、多くの摩崖仏を含む岩屋が生まれたと考えた。なお、久寿２年（1155）と保元２年（1157）の銘を有する奈良県の春日山石窟においても天台修験の影響が及んでいる可能性があることも注目される。

本研究を通して新たな課題も見えてきた。石造物の古代と中世を画するものに矢を用いて石を切り出す技術が考えられており、大陸からこの技法がもたらされることで、中世以降、石仏も大いに普及していったとみられる。しかしながら鎌倉時代後半から活躍する、伊派と呼ばれる宋からわたってきた石工集団が石仏を手掛けるようになる前に、比叡山や京都の周辺では、すでに軟質の花崗岩である白川石を用いた造像が数多くみられるようになり、これらは比叡山系の石仏と呼ばれている。天台修験に源流を持つ大分県の磨崖仏の盛行と、比叡山系石仏がどのような関係にあるのか、そしてそれらが中世石仏へとどう引き継がれていくのか、中世石仏の成立を考えるうえで重要な問題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 神田雅章	４．巻 496
２．論文標題 宇智川磨崖碑に関する一試論　―本生譚の美術として―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 龍谷大学論集	６．最初と最後の頁 57-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山田　修 (yamada osamu) (30571723)	奈良県立大学・東京藝術大学 (24602)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関